

神谷 第2散布地

発掘調査 説明会資料

2009. 8. 12 兵庫県立考古博物館

山崎土木事務所がおこなう「地域自立活性化交付金事業」の道路拡幅工事に先立って、兵庫県立考古博物館では、宍粟市山崎町神谷にあります、神谷第2散布地の発掘調査を実施しています。発掘場所は河東小学校の南西百数十メートルの位置にあります。

発掘調査範囲は、約4.7m×52mと南北に細長く、面積が約240㎡と狭いうえに、後世の大規模な攪乱もあり、遺構(※1)が残っていた部分は限られていましたが、弥生時代と古墳時代の竪穴住居跡などとともに多くの遺物(※2)が発見されました。

弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構では、平面円形と推定される竪穴住居跡1棟のほか、溝や土壇(※3)があります。竪穴住居跡は一部分が発見され、直径は7mと推定されます。後世に周囲が削平されていたため、数センチの深さしか残っていませんでしたが、床面から壺・甕などの土器のほか、矢じりなどをつくる際の小さなかけら(剥片)が集中して出土しましたし、床面には炉と思われる赤く焼けた部分があり、そこで煮炊きを行っていたようです。

土壇S X06は長径3.6m、短径2.3mの楕円形で、深さは60cmあり、内部には多量の使用済み土器や、割れた石皿が捨てられていました。

長さ4mの溝2の底付近には数多くの礫が転がり落ちた状態で出土しており、周囲に溝をめぐらせ、墳丘を盛った有力者の墓(方形周溝墓)の一部分かもしれません。

以上、弥生時代の遺構は、出土土器の特徴から、弥生時代中期中葉(皿様式期)であり、今から約2,100年前と判断でき、当時にこのあたりが集落であったことを示しています。

古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡が2棟(住居跡2・4)発見されました。いずれも一辺4.4m程度の平面方形ですが、上部の削平や周囲の攪乱のため、全容をうかがうことはできませんでした。

どちらの住居跡にも当時使用されていた土器(須恵器・土師器)が残されていました。その土器の特徴から、古墳時代後期の6世紀中頃～後半で今から約1,450年前になります。

住居跡2には西壁にカマドが残っており、住居跡4も土器からカマド付近と思われます。

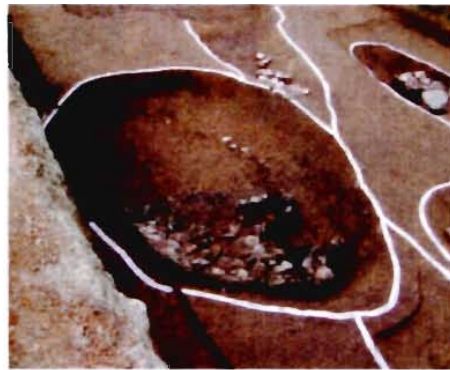
今回調査した範囲は当時の集落のごく一部分で、周囲にはまだ多くの住居跡が埋まっていると推定できます。また特に、弥生時代中期の住居跡が見つかっている集落跡は、山崎町内でも鹿沢や上比地などに限られており、町内では数少ない例になります。当時の人が水田に近く、かつ好条件の土地を選んで生活していたことがうかがえます。

(※1 遺構: 昔の人が大地に刻んだ、溝や竪穴住居跡、柱穴などの総称。)

(※2 遺物: 昔の人が使っていた道具類などで、土器や石器などの総称。)

(※3 土壇: 土坑とも書く。地面に掘られた大きめの穴の総称。)

見つかった祖先の痕跡
(模式図)



S X06と内部の土器 (弥生時代)



住居跡4 (古墳時代)



住居跡4の土器出土状態

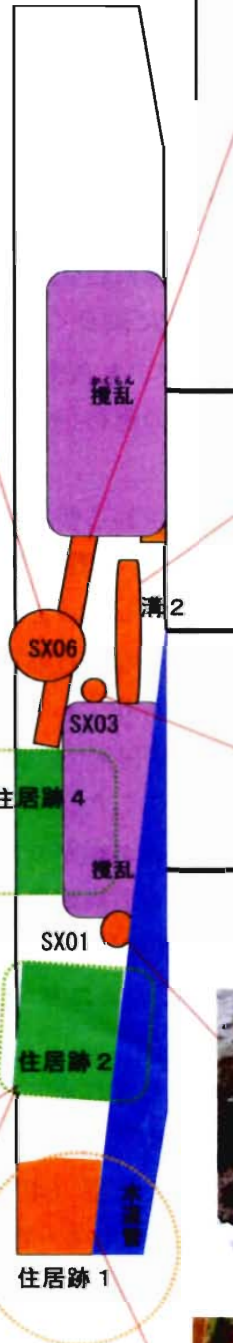


住居跡2 (古墳時代)

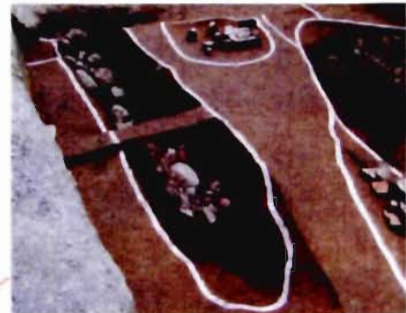


住居跡2の土器出土状態

北



溝1の土器 (弥生時代)



溝2 (弥生) と土器・碟のようす



S X03 (弥生時代)



S X01 (弥生時代)



住居跡1 (弥生時代)